

ホトトギス 昭和二十九年三月十八日 創刊二十八年二月 日発行 第四百十八卷 第三号

# ホトトギス

三月号



## 俳句随想 〔三百九十三〕

汀子

ある句会で一字一句違わない句があり、その句が誰かの選に入って二人が同時に名乗った。漢字を使っていること、送り仮名すべて同じであった。それに気が付いて私は選ばなかったが、互選に入った。二人とも声を大にして譲らなかつた。その他の発想の句で似た句が四句あり、私は何れも選句から外した。

兼題に「粕汁」「冬木立」席題に「短日」「初雪」と出ていた。似た発想の俳句が沢山出て来たのには驚いた。最近、大きな大会の募集句の中で、入選した俳句を類想句ではないかと調べる。そしてすでにある俳句であれば入選から外すという作業がなされるが、ある募集句で、入選した句に同じ着想の句があるが、どこまでが許容できるかと尋ねる作業があった。同じ感覚を持つ人間であり、ものの見方、感じ方が同じ発想となることがあるのは当然のごとである。それを恐れては俳句は出来ない。もし、同じ句が出来たならそれは自分の句帳に大事に仕舞って置いて欲しい。でも同じ発想のその句は秀句にはならない。一般的な発想の句としての評価となる。

初めから名句を真似て作るのは言語道断。その作者に作家としての未来はない。最近、私の句をばらばらにして組み立て直したような句を見てがっかりしたことがある。初心者は初めは真似るといふ所から始めることも一つの方法かも知れないが、表現が拙くても、一步一步自分の表現、自分の考え、自分の言葉で短い詩へ俳句を作って、すでに似た句があればそれは自分の句帳に仕舞って欲しい。

旬日記 汀子

平成二十六年三月一日 芹屋ホトギス会

この辺り流れ淀みて水草生ふ  
三月といふに寒暖ととののはぬ  
三月三日 ロイヤル俳壇

一歩より桃の節句といふロビロ  
鎌倉に住みし日はるか実朝忌  
教室を間違へしとや山笑ふ

三月四日 靖月夜句集『蕎麦の花』序句  
緋けばかがよふ蕎麦の花明り

三月五日 ロイヤル俳壇水曜日の教室  
海見えてより六甲の山笑ふ

片づきて桃の節句のなきロビロ  
今日海の明るき日なり山笑ふ

忌ごころも桃の節句でありしかふ  
三月八日 関東ホトギス俳句大会前日句会

山肌を染めて紅梅林かな  
どこまでも霞む関東平野かな

三月九日 関東ホトギス俳句大会  
見えしとも見えざりしとも富士おぼろ

帰路遠し一泊二日木の芽風  
三月九日 関東ホトギス同人会

香の届かざるは俯瞰の梅林  
ほぐれゆく木の芽つんつん九十九折

地 平線 関東 平野 遠霞  
三月十一日 大阪倶楽部

春塵を残していまだ被災の地  
水取の寒さ納得してをりぬ

つんつんとももの芽立のある辺り  
大方は引きたる鶴の消息も

春塵を抜けて離陸の旅立に  
人悼みつつもの芽に膝を折る

三月十一日 綿業倶楽部

雖に留守たのみ仕事に旅立ちぬ  
東京の雪の果とはならざりし  
遠き娘に雛を飾りて置くことも  
内緒ごと雛のまなざし語らざる  
一稿を送りて雛の夜となる  
三月十三日 清交社

心配の春の雪とはならざりし  
陽気ややほぐれし辺り水草生ふ  
近づきし花の吉野の旅程組む  
もう信じられさうにふと暖かし

まだ油断ならぬ日もあり春の雪  
降られても恵みの雨よあたたかし  
暖かき身軽な旅でありにけり  
三月十四日 工業倶楽部

街霞みビルの高さを失へり  
醜草も名草も芽吹きはじめけり  
霞抜け 水平飛行空の旅  
又踏んでしまふ草の芽なりしかな

霞む山見えて近づきをりにけり  
悼 志鳥宏遠様  
暖かき笑顔ばかりが甦る  
三月十六日 下萌句会

風よりも日差に春のありしこと  
如月の届かぬままの消息も  
春めくといふはやうやく今日のこと  
三月十七日 アサヒカルチャー

新しき十八階やあたたかかし  
句会場 出来て春灯点りけり  
三月十八日 有恒俳句会  
暖かき日とてまだまだあと戻り

踏青の一步忽ち野を占むる  
暖かくなりて身軽な旅となる  
癒を許すことは忽ち暖かかし  
癒えられてまこと暖かなりしかな

三月十八日 無名会  
抜けられぬ霞の果のなかりけり

踏まれても又立ち上る草の芽よ  
醜草の芽よ踏まれても踏まれても  
考へへの二転三転遠霞  
霞む山だも名草醜草なく萌えて  
どの芽とも名草醜草なく萌えて  
三月十九日 夏潮句会

主とて気づかぬ花のほころびて  
はじまりぬ花の吉野の案内状  
雛納惜しめば又も人集ふ  
雛花に気づかぬ人のなかりけり

初花の咲きゆく早さとどめたく  
牡丹の咲きゆく早さとどめたく  
咲き進む桜の勢ひとどまらず  
祝「寒雷」八百五十号

春光のあふれ思ひ出なつかしく  
祝ぎ心抱き春めく心もて  
緋けば初蝶の舞ひ出づるかな  
三月二十七日 きささぎ会

計画の二転三転水温む  
祝ぎの日の遠ざかりたる水温む  
旅の雨止みさうに水温みけり  
いくたびもあると思はず大試験

ふり返る日々のいづこに大試験  
計画は花の遅速にかかはらず  
三月二十八日 時雨句会  
祝ぎの日の過ぎるは早し霧れる

母子草踏まれてそこが出入口  
春雷の一喝あぐん伸びて母衣草  
青空のぐんぐん伸びて母衣草  
六甲の稜線遠し霧れる

三月二十九日 句会と講演の会  
暖かき心寄せ合ひ会となる  
快晴の色を払げてたんぼげ野  
滞在の自由楽しみ春めくかな

青鰻の仲間も馳走でありしかな  
上木の心春めくものとして

# 廣太郎句帳

廣太郎

三月十日 朝日カルチャー若草句会

ビル風に春めく心奪はれし  
里山の水の眩き田螺取  
芽柳や風に詩心移しゆく

三月十二日 北國文芸選者吟

平成二十六年三月一日 芦屋ホトトギス会  
三月や帰路三時間歩きし日  
みくさ生ふ河童伝説秘めし沼

青空を統べ白梅の気品かな  
はだれ野となり動くもの消ゆるもの  
芽柳に猫の手伸びる一とところ

三月十三日 土筆会

三月二日 野分会芦屋例会  
土手といふ褥に土筆並びけり  
這ひつくばり目を皿にして土筆摘む  
土筆摘む日出づる国の小市民

魁けて食ぶ長命寺桜餅  
雲雀野を掬ひ上げたる疾風かな  
帰り来よ皆帰り来よ涅槃西風  
揚雲雀地球の自転速めをり  
イカロスの翼を捨ててより雲雀

三月三日 カトリック新聞選者吟

三月十四日 六甲会

春雪の嵩に戦く被造物

三月六日 蕉心会

漣をゆりかごにして蝌蚪の紐  
帰る鳥影を大きく回しけり  
酔うてゐるほどの椿の色であり  
啓蟄の庭に何かが起りさう  
地虫出ず関東ローム層の庭  
啓蟄や二十五歳になつた君  
青空に己を描く椿かな

賀に侍る客人連れて涅槃西風  
三月十四日 虚子記念文学館投句

三月八日 関東ホトトギス俳句大会

三月二十日 登高会

電気街発ちて学園都市うらら  
残雪のあの山の名を聞かれても  
白銀の連山模糊と朝霞

将来は大賞か菊の苗  
菊の苗父の生き甲斐始まり  
菊の苗未来の風を浴びてをり

春塵に鼻奪はれてをりにけり  
春塵を雨に沈めて丸の内  
古都といふ炬燵塞ぎてよりの冷え  
三月二十三日 野分会東京例会  
若鮎に大河は黙を解きにけり  
若鮎にいよよ魚道の狭まりて  
土筆野へ船出をしたる一俳徒  
一本の土筆に動き初む大地  
三月二十五日 若水句会  
暖かく関西人に囲まれて  
春子売る関西弁の漢かな  
医者嫌ひ春椎茸を頼みとす  
朝霞抜けて関西弁の語尾  
暖かき道未来へと伸びゆけり  
今日よりの句は春子と大書され  
三月二十六日 目黒学園句会  
鳥帰る千年前と同じ道  
木の芽風聖アンセルモ教会に  
朝東風に稜線立ち上がつてをり  
朝東風や人は斜めに吹かれをり  
強東風や人は斜めに吹かれをり  
集ひしはビルの上空鳥帰る  
鳥帰る日本海といふ史実  
三月二十九日 ホトトギス社句会  
旧曆に花の遅速を聞きもして  
青饅に暮れゆく京の路地の奥

# 雑詠 廣太郎 選

天平の門 天平の倉 小春 奈良 古賀しづれ  
 どの道も史跡に尽くる紅葉狩 同  
 初冬の翳となりきり鹿老いぬ 同  
 地震被災十年目来しそぞろ寒 長岡 安原 葉  
 野に人等立ちて黙禱そぞろ寒 同  
 森奥へ奥へ入り訪ふ露の句碑 同  
 夢二忌の大きな露として山湖 渋川 木暮陶句郎  
 この雨に滲む花野も忌心も 同  
 霧冷の指と思へばいとほしく 同  
 とこしへに遺影幼き夜寒の町 東京 大久保白村  
 子の墓に小鳥の先に来てをりし 同  
 稲妻や子の霊園はあのあたり 同  
 乾坤に無限の詩や月の秋 福山 竹下陶子  
 天帝の一瞥に消え曼珠沙華 同  
 原爆の聖霊くだる流灯会 同  
 きくきくと要鳴るなり秋扇 神戸 千原叡子  
 秋刀魚の詩口ずさみつつ焼く女 同  
 瑩域に墓碑桿犇きで西鶴忌 同

小鳥湧くやつと晴れたる朝空に 龍ヶ崎 今橋真理子  
 日本の色を広げて稲穂波 同  
 一粒の空へと続く稲の秋 同  
 ささくれし風の終点破れ蓮 神戸 山田佳乃  
 北国の杳音重し林檎売 同  
 うまさうに見えて手の出ぬ茸かな 同  
 名園の品格鴨の陣新た 東京 橋本くに彦  
 オリオンの寝起きの顔や冬に入る 同  
 尽きるまで色の調合冬もみぢ 同  
 月親しひたと地球の影重ね 米子 中村囊介  
 佇めば誰も花野の人となる 同  
 邯鄲の音の琴線に触れてぬし 同  
 ともづなを抱へ舐先へ頬被 東京 田丸千種  
 鴨騒ぐ佃小橋に潮さして 同  
 しぐるるや湯屋へ渡せる赤き橋 同  
 白内障手術せし眼に竹の春 熱海 嶋田一步  
 青空の日差しは広く竹の春 同  
 日の暮れの早くなりしよ竹の春 同  
 みちのくの暗さに紅葉濃かりけり 袋井 湖東紀子  
 赤い林檎青い林檎も鈴生りに 同  
 津軽弁聞き返しつつ林檎買ふ 同  
 夜なべして頭重たき目覚めかな 八尾 山下美典  
 だんじりに村の意地あり期待あり 同  
 団栗のいつか芽を出すため尖る 同

# 雑詠句評(二月号より)

佳乃・公次・霜衣

しげ人・純也・雅

仁義・くに彦・さい雪

一歩・廣太郎

## 厨より書齋に移る夜長の灯

直方

林加寸美

暮らしの灯を少し遠いところから眺めているように思える。御自身の動きなのだろうけれど客観的に込めたことで人の動きがほんのりと想像されて詩情を感じさせる。日常のありきたりの風景なのだけれど、灯しの移りゆく映像が眼前に浮かんでいろいろと想像させる一句である。(佳乃)

主婦として厨仕事をこなし、その後文筆活動をなさるといふ多忙な姿が見て取れる。主婦業、さして俳誌の主宰者として活躍されている作者の姿が真つ先に想像出来るが、それをすらりと客観的に叙しておられるところが非凡なのである。季題の季節感も余すところなく表現されている。(廣太郎)

## 聖母像露の祈りを唱へけり

東京

田治 紫

聖母像とは、教会に掲げられているマリアの肖像であつて、露の祈りとは、古来、露の身とか露の世などといつて、はかないものにとえられている「露」の感じの祈りであろうかと思う。「露」という季題の大きさの感じられる句と言えるだろう。

(公次)

カトリックの教会や、学校や修道院等には、至る所に聖母マリアの像があり、崇敬の対象となっている。その像に祈りを捧げているという解釈と、像自身祈りの姿勢で表現されていることもあり、両面から解釈が出来るだろう。何れにせよ「祈り」という表現が季題を強調している。(廣太郎)

天地有情

金子選

卯の花の色に喪心引き寄せて  
 喪の旅を終へて都心の青嵐  
 ふる里の山河なつかし野菊晴  
 夜の帳下りし山里うそ寒し  
 朝よりも昼よりも夜のうそ寒し  
 柚子菓子の天下一とぞ申さるる  
 慟哭の津波跡なる秋の虹  
 袴りの歩やがて花野の津披跡  
 妙高の秋を染めゆく朝日かな  
 橋脚となりし島々夕月夜  
 つなぎ来し重き歳月賀状書く  
 存問と生ける証しの賀状書く  
 秋の風ただ筆硯を友として  
 水澄んで故郷いよいよ貴かり  
 四海波静かヨットの浮くかぎり  
 ヨットいま掛かる船弁慶の浦  
 神還り給ふ銀杏の錦かな  
 煩惱の心底までも水澄める

東京 稲畑廣太郎  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同  
 千葉 大木さつき  
 同  
 東京 河野美奇  
 同  
 同 大野雜草子  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同

露寒の探し当てたる墓ひとつ  
 木国の墓とのみあり露の中  
 肌寒といひこれからが寒いこと  
 日当つてみて立冬の景となる  
 空の青恋ひコスモスの揺れやま  
 何事もなきかに蝕の果てし月  
 宙を飛ぶ紙ひかうきや冬ぬくし  
 羚羊の親子来てをり草紅葉  
 天高し富士は白さを大きくし  
 湖に映る雲ありしこと天高し  
 雌ばかり生き残りたる冷まじき  
 マクベスの森の如くに冬来る  
 一枚を羽織りてくれしそぞろ寒  
 大綿の真昼の黙の池渡る  
 秋深し伊丹に古き良き家並  
 初冬やふとありそめし静心  
 坂多き街の余寒を駆け抜ける  
 ひといろの空より降りて来る余寒

神戸 三村純也  
 同  
 同 後藤立夫  
 同  
 吹田 大橋 暁  
 同  
 仙台 赤川誓城  
 同  
 熱海 嶋田一步  
 同  
 群馬 中杉隆世  
 同  
 吹田 宮崎 正  
 同  
 箕面 井上浩一郎  
 同  
 東京 今井肖子  
 同

## 今年の西の虚子忌 稲畑汀子

台風十九号は未曾有の勢力で警戒が必要であるとテレビで早くから報じていた。900ヘクトパスカル、最大風速70米……。

「うへー、すごいなー」

方角は中国に向いている。九州辺りで向きを東に変えるそうだが、まだ人事のような気持ちで予報を見ていた。日本に近づいて来るにしたがってよいよ予報が当たりそうになっていた。速度がゆっくりで、台風のパワーが衰えないのが気になった。

十月十日は朝一番で上京して朝日俳壇の選句の後、工業倶楽部の俳句会へ行き、午後五時半羽田発の飛府機で芦屋へ帰る予定は順調に運んだ。まだ台風は遠くて影響のないまま私のスケジュールは順調に進んでいった。

体育の日の祝日を入れて三連休が次に続き、その辺りに台風が来そうな予報になってきた。

「何故か、その三日間予定が入っていない。やれやれ」

しかし台風は足踏みを続け、来る日も遅れる予報となってきた。

「あれー西の虚子忌は大丈夫かな……」

三連休に続く十四日は、恒例の西の虚子忌であり、私の車にひ

ろさんと好子さんが同乗されることになっていた。

「先生、西の虚子忌は取り止めては如何でしょう」

世話をして下さる堅田の石川多歌司さんから電話がかかって来たときには、近畿地方も直撃かも知れないという予報になっていた。

「いらっしやる方々に連絡がつくかしら」

「大丈夫です。お任せ下さい。先ず、叡山の元三大師堂へお伺いします」

「よろしくお願いします」

今年の西の虚子忌は取りやめとなった。元三大師堂の住職が独りで虚子忌の法要を修して下さるということになり、連絡も完了したと多歌司さんから連絡が入った。

「元三大師堂のお坊様が法要を上げて下さるのなら、身内の私だけでも車でお山へ上がらなければもうしわけないのではないかしら。余程天候が悪かったら止めるけど」

「そのときは連絡して下さい。私達夫婦がお供します」

「いいえ、大丈夫ですよ。その時の様子で、危ないと思ったら止めますから」

十月十四日朝、台風十九号は中心が関東地方から東北地方にあ



ると報じていた。我々が寝ている間に通り過ぎたのか外は青空が見えている。

「あれー。ひとつばしりお山へ行きますか」

廣太郎に電話をかけた。

「この辺も通り過ぎたみたいだけれど、今から行けないよ」

「私だけ、行ってくるわ」

「そうしてくれる？ 僕は今から会社へ行くからよろしく」

多歌司さんにも電話をした。

「私も行きます。この辺はまだ雨が残っていますよ」

「そうなの。私だけ気をつけて行って来ますから多歌司さんは来ないで下さい」

「そうは行きません。治子と行きます」

奥比叡ドライブウェイは去年より紅葉が進んでいて美しい。一台の車もない山道は所々に『世界遺産……』の立て札があり、一人で世界遺産の山道を独占して行くような気分が襲われ快適なドライブである。時々台風の名残の雨か、霧雨のようにフロントガラスを濡らして行く。

元三大師堂に着いたが、今日が西の虚子忌とは思えない静まり返った佇まいであった。何時も入る玄関の戸をそろそろ開くと、中に見慣れた僧の女性がにこにこ迎え、手を差し伸べて下さっ

たので思わず握り返した。

「よく来てくださいましたね」

ここの住職が出て来て、

「よく来て下さいました。今日は八人の僧が上がって来てくれました。法事が始まるまでこちらでお待ち下さい」

八人も横川へ上がって来られて、私だけでも来てよかつたとはつとした。案内された部屋は何時もの部屋の隣である。私のために座いすが置かれてあった。

来なくていい、と言っていた多歌司さんご夫妻が間もなく来られたので何となくほつとした。

いつもと同じ十一時になると何時もの場所に案内された。お馴染みの顔の僧が次々祭壇の周りを取り巻き、法事は何時もと変わらず肅々と進んで行った。

「ああ今年も転ばないように立ち上がらなきゃ」

私は思わず呟いた。

何年か前のことになる。虚子像の前でお焼香を済ませて立ち上がろうとしたとき、足が縛れて転んで仕舞い、後ろのお坊様の膝に乗っかってしまった事がある。

「あー！ ごめんさい」

「あははは、大丈夫ですか？」

「だっごしよ。」

と立ち上がったが恥ずかしかった。平気な顔をして、

「ごめんなさう。」

と、小さく呟いて席に戻った。それは横川へ来るとずっと私の脳裏から離れない。どのお坊様か忘れたが、今年も転ばないようにしなければと思いついていた。

辺りに散らされてある蓮の花の散華を何枚か手にすると気をつけて立ち上がった。

その足で外に出た。墓前祭が虚子塔の前に用意され、お坊様が並んでいるなかでいつものように焼香を済ませた。

堀田民さんが一人参加されていた。我々はお坊様達のために用意されてあるワゴン車に乗せて頂き楽に大師堂へ戻ることが出来た。

三人で部屋に戻ると、仰木米の新米のお齋が用意されていた。

「今日は少ない人数で内容の濃いご法要でしたね。」

と言う住職に送られて私は大師堂を後にした。

